

「国語総合」 森鷗外「阿部一族」の授業

国語科 金本宣保

2003年度、高等学校1年「国語総合」で、小説 森鷗外「阿部一族」を教材として授業をした。はじめに「最後の一句」、「寒山拾得」、「山椒大夫」、「高瀬舟」の授業をした。「阿部一族」の授業は、導入で「鷹の殉死」「内等長十郎の殉死」を読み、「阿部弥一右衛門の死」から「阿部家の最期」まで取りあげ、場面の要点を理解させた。その後、自分の興味を感じる人物を取りあげて作文を書かせた。学習者は、異質な世界を読み取り、文章表現を味わい、思考を深めて表現する力を高めることができた。

1 「国語総合」の中での小説の学習

2003年度の高等学校1年「国語総合」4単位の中での現代文の小説の授業の展開は以下の通りである。

- | | |
|---|---------|
| (1) 「棒」安部公房 | 5時間 |
| (2) 「阿部一族」他 森鷗外 | 16時間 |
| (3) 「羅生門」芥川龍之介 / 「指」鷲沢萌
「待ち伏せ」チム・オブライエン / 「清貧譚」太宰治 | 4編計 4時間 |

教科書は筑摩書房「精選 国語総合」で、(2)以外は教科書の教材を使った授業である。ここでは、(2)の授業の実践を報告する。

2 教材

集英社文庫 森鷗外「高瀬舟」 目次
じいさんばあさん / 高瀬舟 高瀬舟縁起
山椒大夫 / 寒山拾得 寒山拾得縁起
最後の一句 / 境事件
阿部一族
歴史其儘と歴史離れ / 遺言
語注 小田切進 / 解説「自己犠牲」の系譜 川村湊
鑑賞 翻訳の不可能なる 林望 / 年譜 小田切進

3 授業その1 森鷗外入門

- | | |
|--|-----|
| (1) 「最後の一句」の授業
全文を黙読する。いちの最後の一句の意味を読み取る。 | 1時間 |
| (2) 「寒山拾得」の授業
全文を音読する。寒山拾得の描き方から小説の構造を理解する。 | 1時間 |
| (3) 「山椒大夫」の授業
全文を黙読する。 | 1時間 |

4 授業その2 「高瀬舟」

- | | |
|---|-----|
| (1) 「高瀬舟」の授業の展開 | 3時間 |
| ① 「高瀬舟」全文を音読する。
「高瀬舟縁起」と「流人の話」(プリント資料) とを読む。 | 1時間 |
| (注) 「流人の話」 「鷗外歴史文学集 第三巻」岩波書店「参考資料 流人の話」(神沢貞幹『翁草』から) | |
| ② 「高瀬舟」と「流人の話」とを比べて作文を書く。 | 1時間 |
| ③ 作文を発表する。 | 1時間 |

(2) 学習者の作文例

以下作文例は、1年A組(男子21名女子19名計40名)のものである。

作文例A 「喜助さん」の「さん」について
「高瀬舟」では、この流人(喜助)を島へ送っている同心(庄兵衛)は、なぜ島へ流されるのがうれしそうなのか聞いた後に、罪人に対して「喜助さん」と無意識に言ってしまった所があります。「流人の話」では、そんな場面はありません。これは、森鷗外自身が、罪人の欲のなさ、謙虚さに対して驚き、感心し、尊敬に近い気持ちを持ったからだと思います。ごく普通の質素な暮らしをしていたこの同心は、今はなんとか暮らしていても、生活に満足したこともない。しかし、自分よりずっと厳しい暮らしをしてきた罪人は、たった二百文で満足し、居場所を見つけてうれしそうにしている。そんなわずかのものでも満足する心というものは、人はみないつかは持っていたものだと思います。同心も、罪人の姿を見て、自分もいつかはこうだったと、うらやましく感じ、同時に、なぜ自分がこのようになってしまったのかと、後悔もしたのだと思います。だから、罪人が自分よりも輝いてい

るように見え、無意識に「さん」をつけてしまったのではないのでしょうか。

作文例B 「喜助の心境」への批判(部分)

確かに二百文程度のお金で満足できることはすごいと思う。しかし、喜助にとっては世界ががらりと変わった。いうならば「地上」から「天界」に行ったようなものだろう。庄兵衛にとっては「地上」から「山」へ登るようなものだろう。喜助は違いが大きいために満足できたのではないか。段階を踏んで上へ上がっていくにしたがって目標の先も見えてくる。喜助は日々生きていくことが目標であり、その先は見えていなかったのではないか。

喜助がこのまま島で安定した暮らしを続ければ、きっと庄兵衛のような心境のなると思う。

作文例C 「安楽死」について

「流人の話」には「自害をしかかり、死兼居けるを、此者見付けて、逆も助かるまじき体なれば、苦痛をさせんよりはと、手伝ひて殺しぬる」とあるが、鷗外の「高瀬舟」では、悩んで自害を助けたと書いてある。(略)

鷗外の文章は恐ろしい。自分が手伝わざるを得ない状態だ。だからといって実の自分の弟を自分の手で殺すのは忍びない。しかし、弟の気持ちを考えると手伝わなくてはならない。その二つの気持ちの葛藤がこの鷗外の文にはよく表れていると思う。

安楽死というものについて考えさせられました。

作文D 「人を裁く」こと (部分)

理論と人情の違いを感じました。理論というか、人の決めたままりというものはかたくなな所があり、例外の人々を困らせると思います。理論も人情もどちらが間違っているということはなさそうに思いました。人が判断をしっかりとしなきゃいけません。公正な判断をする為には理論が要るし、また、この「高瀬舟」のような時もあります。

「人を裁く」って言うのはとても難しい事だと思います。その人を裁くことによって、どこか自分を裁いているみたいところが有ると思うからです。皆、全く間違いを起こしていない人はいません。だから、きっと絶対に正しい判断なんてないと思います。

(3) 授業のまとめ

小説の登場人物と作者森鷗外との関係についてまとめとして、授業後のテストで次のような問題を出した。

問題文 「高瀬舟」の本文(略)

問 次の文章は右の小説を解説したものである。【ア】～【キ】に適切な言葉を考えて、それぞれ十字以内で書け。(ここでは空欄に指導者の解答例を入れて示す。)

庄兵衛は、喜助の話聞いて「わが身の上に引き比べ」てみて考える。喜助も自分も、もらったものを「右から左へ人手に渡して」暮らしている、つまり、【ア 生活にゆとりがない】という点では同じであると思う。しかし、不思議なことがある。喜助は「足ること知っている」が、自分は暮らしに「満足覚えたとはほとんどない」。状況は同じであるが、この点では全く違う。

庄兵衛は、「いったいこの懸隔はどうして生じてくるだろう。」と問う。「それは喜助には身に係累がないのに、こっちにはあるからだ」という答えが考えられる。そう答えれば、【イ 間は解消される】。「しかし、それは嘘である。」と庄兵衛は自身で否定する。それよって、「この根底はもっと深いところにあるようだ」と進んでいく。この展開は庄兵衛の思考の展開として表されているが、もちろん作者鷗外の思考の展開である。だが、さらに考えれば、ここは鷗外自身の問答というよりも【ウ 読者への問いかけ(説得)】と考えられるだろう。

この結びで、【エ 仏のような人(悟りに達した人)】という喜助の人物像が浮かんでくる。

作者森鷗外と小説の登場人物、喜助、庄兵衛との関係を考えてみよう。単純化して言えば、庄兵衛に森鷗外の【オ 実際の生活(生きている状況)】が表され、喜助に鷗外の【カ あこがれ(理想とする心境)】が表されると考えられる。この二つの関係のしかた(構成)を、「高瀬舟」の庄兵衛と喜助とにおいてみると、庄兵衛は喜助にとって【キ 他人に伝える者(理念を支えるもの)】という構成になっている。

このように二つのものが同居し、構成されて進行するのが、鷗外の作品だということができる。

問題の解説

「主人公の喜助のことが、喜助自身の語りによってでなく庄兵衛によって語られているのはなぜか。」という問いが、まとめの主題である。森鷗外は、表現することの難しい、近代の論理で一般的に表せないことを、表現しようとしている。「庄兵衛一喜助」と同様な関係は、授業をした他の小説でもみられる。「最後の一句」では「役人一いち」、「寒山拾得」では「富千一寒山拾得」、「山椒大夫」では「厨子王一安寿」が、それぞれ「説明する人物一理想の人物」という形になっている。

5 授業その3 「阿部一族」

授業の展開

- ① 導入

書き出し・鷹の殉死	1時間
内藤長十郎の殉死	1時間
- ② 「阿部一族」全文を読む。(夏休みの課題)
- ③ 取りあげた部分を読解する。 各1時間計5時間

阿部弥一右衛門の死	
阿部権兵衛の事	
阿部一族の立て籠もりと討手	
柄本又七郎	
竹内数馬	
阿部家の最期	

授業では教室で音読させ、場面の要点を理解させた。「阿部一族」は、近代小説である。江戸時代の人間の書いた物語ではなく、歴史でもない。資料によっているが、こういう作品として森鷗外という近代日本の文学者が著した作品である。「昔の人の考え方」という言葉で、学習者が思考を停止することがないように気をつけた。
- ④ 自分の興味を感じずる人物を取りあげて作文を書く。

構想1時間 書く1時間 計 2時間	
-------------------	--
- ⑤ 作文の発表 まとめ 1時間

6 「阿部一族」についての学習者の作文

生徒が作文に取りあげた人物とその数

細川忠利	4	鷹	1
内藤長十郎	11	津崎五助	3
阿部弥一右衛門	4	阿部権兵衛	3
阿部弥五兵衛	2	竹内数馬	3
柄本又七郎	6	高見権衛門の小姓	1
畑十太夫	1		

以下、作文例を示し、授業で生徒が発表したとき指導者が加えた短評を記す。授業では小説の展開の順で15名発表させた。なお、作文の引用での(略)および下線は、すべて紀要執筆者金本による。

作文例E 細川忠利について

(引用文略)

「殉死」という感覚自体、戦国や江戸のころの封建社会に息づいていたものであり、現代の社会の感覚ではよくわからないものです。それがどのような意味を持っているかは封建社会のしくみ、つまり、殿様と家臣との関係において、自分は死ななければならぬ運命として考える気持ち一ましてや、それもお許しがいるなど、現代の世界では理解できないものがあるでしょう。でも、その中で、やはり忠利は家来たちを死なせることに罪悪感もあつたし、人の命に対する根底の考え方というものは、現在と変わらないものだと思います。

では、なぜ「殉死」や「切腹」というものが根付いていたかといえば、やはり背景となる武士の世や精神が関係するのだと思います。ここにも表されているように、周りが自分は殉死すべきものとして見ている、生きのこれば世間から卑怯者と言われる。それは、世間からの目というもの一自分がいかに立派に生きたかということ一は、武士という種類の人々の目から見れば死ぬことよりもつらいことであるということが、大きく関わっているのだと思いました。

阿部一族は、このような世の中で、一族の中のたった一人この精神に反した者がいただけで、みなが同じように反したとみなされ、滅ぼされることになってしまった、悲しい一族だと思いました。また、それと同時に、戦国や江戸の栄華の裏にある精神・世間というものを反映した、いわば影のような存在であると思いました。

指導者の短評「『阿部一族』の殉死の精神をよく説明している。」

作文例F 津崎五助について

「おぬしは畜生じゃから(略)」

忠利の犬牽きである五助がいつも牽いてお供をした犬に話しかける。主君にねだって殉死のお許しは受けたが、家老達には「御当主に御奉公してくれい」と言われていた。しかし、五助はどうしてもきかなかつた。犬に自分の握り飯全てあげたり、人間に言うように話しかけたりするところで、五助の犬への愛情や対等に思っている心情がよくわかります。また、犬もすぐ食べようとせず、尾をふって、五助の顔を見ていたので、犬もずっとお供をしてきた五助に感謝の気持ちや服従の気持ちを持っていたのだらうと思いました。犬と人間が、人間と人間のように言葉で気持ちを伝えあうことはできないけれど、五助とこの犬とはとても心が通い合っていて、友情とは言えないけれど何か強いもので結ばれているようにみえま

す。共に死ぬという場面で、五助が強制的に犬を殺したのではなく、犬も同意したところに感動しました。

指導者の短評「小説のことを今と同じと受け止めているのがいい。」

作文例G 内藤長十郎について

(引用略)

長十郎は十七歳という未来に希望のある年齢にもかかわらず、自分の仕えている主人のために殉死を選んだ。主人によくしてもらったという忠誠心と、他の家来の人たちは自分が殉死するのが当たり前で、もし、しなから責めるであろうと周囲を気にしてという二つの気持ちが長十郎の心の内にはあった。しかし、忠誠心の方が大きく、許しを得た後の長十郎は許してもらった喜びと、殉死する、つまり、死ぬことが決まった、もう後には戻れないという無気力感を感じた。その複雑な気持ちを、森鷗外は自然と読み手が共感するようにかいている。

そして、この場面を読んでいると長十郎が十七歳という若者には見えず、主人に仕える大人、奥さんのいる大人、とても立派な大人のように映る。昔は、十七歳はもう大人という社会認識だったのだろう。だから子供の心でいろんな事に興味を持ち、世界を広げるという前にな大人になってしまし、周囲の目を気にし、一つの道しか見えない大人というものになったのだろう。殉死は当然のことだという一本の道しか見えなくなっただろうと思う。もしかしたら、長十郎が殉死を決意した背景には周囲の目があり、その大きな存在にほんの少しの本当の忠誠心が便乗していたのかもしれないと思った。

指導者の短評「自分と同じ年齢の若者として受け止め考えているのがいい。」

作文例H 内藤長十郎について

「そうか。それでは午になったとみえる。少しの間だと思っただが、酔ったのと疲れがあったのとで、時のたつのを知らずにいた。そのかわりひどく気分がよくなった。茶漬でも食べて、そろそろ東光院へ往かずばなるまい。お母あ様に申し上げてくれ。」

長十郎が切腹する前の場面であるが、殉死を請うた彼の強い意志が、死を前にしても昼寝をし、茶漬でも食べていこうかという表現に感じられる。また、作品全体からも、この時代の侍などの死に対する意識の現代人との大きな差も読み取れた。現代人にとって死は、恐怖、またはそれに類するものであると思うが、彼、長十郎、そ

の他の殉死した家臣達には、価値と意味のあることであり、仕えた人にどこまでもついていくことが彼らの忠誠心の表現方法であり、また、それは彼らを取り巻く状況と人間関係によって形造られ、意味を与えられたものであると思った。ある時代タブーとされるもの、ここでは殉死、言ってしまうと自殺であるが、そのようなものが、時と場所を隔てた世界ではいかなる価値を持つのかは、その時代の社会の様子、その時代に生きている人間の価値観によって決められるということに非常に興味を持った。物質には形があり具体的だが、精神によって造られるものは人類が誕生して今まで変わらなかったものはないのではないか、と思った。人類の変化の激しさや、考え方の違いについて、殉死という視点から考えることができおもしろかった。

死について深く考えさせられるような作品で、総じてドロドロとした話の中にも、妙にさっぱりとした部分があって後味が悪くなかった。もう少し深く読みたいと思った。

指導者の短評「説明する理屈がいい。授業のねらいを説明してくれている。」

作文例I 内等長十郎について 部分

この作品は、一貫して殉死について書いてある。様々な殉死のシステムが紹介されている。その中で殉死を許すことが大きなウェイトを占めていると思う。しかし、殉死にメリットがあるだろうか。確かに世代交代の意味はあるかもしれない。しかし、人生の師である老人を大量に殺すことは、その家にとって大変な損失ではないだろうか。そして、阿部家のように許されない家が蜂起したら大損である。だから、殉死は武士のたてまえをとりつくろうだけのものであってなんのメリットもないものだと思う。

指導者の短評「〇〇君らしい見方だ。」

作文例J 阿部弥一右衛門について

阿部一族は滅亡した。事の始まりは忠利の殉死者達とはどこか違っていた弥一右衛門の追腹である。彼は許しを得ていない。弥一右衛門は何ごとにも手抜かりのない完璧な人間であった。弥一右衛門の何が忠利に心の近さを感じさせなかったからである。それは弥一右衛門の完璧さの奥にある思いやりを意地へと変えてしまった原因である。いたる所から意地、強い意志が感じられる。

「その死なぬはずの己が死んだら、お許しがなかった己の子じゃというて、おぬしたちを侮るものもあろう。

己の子に生まれたのは運じゃ。恥を受ける時はいっしょに受けい。」

気になるのは、彼の「己の子に生まれたのは運じゃ。恥を受ける時はいっしょに受けい。」という言葉。今ならば、普通の人ならば、「己のためにお前達をまきぞえにして申し訳ない。」などと言うのではないだろうか。ここに彼のただならぬ意志が感じられる。子供達もそうだ。重要なのは意地しかないのではなく（もちろん意地がなくはないだろうが）思いやりを隠してしまうほど意志が強かったということだ。これがこの時代の武士なのだ。

弥一右衛門にはじまり滅亡に終わった阿部一族。彼らはやはりただならぬ人達だ。この物語すべてにそれが感じられる。殉死などというものは今ではよいものではないが、当時の彼らにとっては、強い武士の意志を反映させる重要な歴史だったにちがいない。

指導者の短評「阿部家の人々の感情に近づいている。」

作文例K 柄本又七郎について

「そこで更たけて抜き足をして、後ろ口から薄暗い庭へ出て、阿部家との境の竹垣の結縄をことごとく切っておいた。」

この文章をなぜ引用したかという、授業で、「なぜ、又七郎は縄を切ったのか？」と問われて分からなかったからです。

もともと又七郎と阿部家とは親しい間柄で、立てこもっている阿部家の屋敷に女房を見舞いに行かせた。しかし、又七郎は主君光尚の命を思い、考えた結果、隣の屋敷なので、境にある竹垣の結縄をあらかじめ切っておき、いちはやく自分の手で、討ち取ろうと思った。それが、分かって、とてもおもしろいなと思いました。

親しき者であるのに殺さなくてはならない。今の世の中ではありえないことだ。でも、そのようなことを当たり前のこととして読者に考えさせるのはすばらしいと思いました。

妻を見舞いにいかせることに、又七郎は悩んでいたかもしれない。しかし、年来懇意にしていた間柄なので、罪を犯すことを予期しながら妻を行かせた。自分ならできないだろうと思う。討つ手としても行けないだろうと思う。又七郎の心の強さに本当に感動しました。

最期に、「阿部一族」は、やはり自分には理解しにくい所も多かった。殉死のこと、立て籠もりのことなど。しかし、この文章はうまく書いてあって納得せざるを得ない。そんな不思議な作品だと思います。

指導者の短評「学習の過程をよく説明している。」

作文例L 弥五兵衛と又七郎について

「二人は一步しぎって槍を交えた。しばらく戦ったが技術は又七郎のほうが優れていたの、弥五兵衛の胸板をしたたかに突き抜いた。弥五兵衛は槍をからりと棄てて、座敷のほへ引こうとした。」

この場面は激しく、スリルがあると思った。阿部一族がたてこもっている所へ討ち入ってきたきた又七郎、それに負けまいとして必死に戦う弥五兵衛、この槍術に自信を持った二人の戦いはとても読み応えがあった。戦いの結果、弥五兵衛は負けてしまう。その後「腹を切る」と言っ座敷にはいった時、弥五兵衛は言い表しようのないほどくやしかったであろう。自分が一番のライバルだと思っていた又七郎に負けてしまい、腹を切つて死のうと思う。よっぽど又七郎を自分のいい相手とし、負けはしないと心で思っていたのだと思う。また、又七郎も弥五兵衛を倒した後に、少年の七之丞に衝かれてしまう。それだけ弥五兵衛に勝つことに大きな喜びを感じ安心してしまっていた。この二人はよきライバルであり、よきなかまであった。

この「阿部一族」という作品は、スピード感があるところとゆっくりとしたところがあると思った。阿部一族が討たれ皆死んでいく場面はスピードがあるが、戦いが終わった後の、討ち入った人たちのその後はゆっくりとしていた。この作品は緩急をつけて、読者に鮮烈な印象を与えている。

指導者の短評「表現のスピードについて書いているのがいい。」

7 学習者が授業で学ぶこと

作文を考察し、学習者が授業で学んだことをまとめる。

(1) 異質な世界を読み取る

作文例Lの『阿部一族』は、やはり自分には理解しにくい所も多かった。これがこの学習の出発点であった。

「授業で、『なぜ、又七郎は縄を切ったのか？』と問われて分からなかったからです。」と書いているように、単純に意味が分からなかった。それが、分かり、登場人物に納得した。

「阿部一族」は、近代小説ではあるが、生徒にとって別の価値観の世界である。「高瀬舟」は、生徒の現在の意識で直接考えることもできるが、「阿部一族」は、生徒の現在の意識と異質な世界である。学習では、異質なものを理解しなくてはならない。それも、教室では学習者が登

場人物の心情を内から味わい、小説として鑑賞することを期待した。

どういう文章であれ読者対作品世界の対立・交流という図式は成り立つのであるが、特に、「阿部一族」の場合生徒と作品の世界とは異質である。小説の主題「死」と自己との方向が逆だ。「死」は生きることを否定するという現代と、みごとな「死」に向かっていることが生きることだという世界。

異質な世界を読み取ることが、授業の意図であった。

(2) 文章の表現を味わう。

森鷗外の文章のスピードのある描写については、よく言われるが、それは、なかなか説明して分かるようなものではない。文章を読むとき、実際には感じているのであるが、なかなか、こういうことだと自覚して受け止められない。作文例Lでは、自分で感じ味わい、自覚し、文章評価の力を身につけている。

描写を味わうことを知って、はじめて文学的な文章を読むということの意味が分かるのである。

(3) 思考を深め表現する。

作文例Fでは、この場面で、普通に共感して読んでいる。人と動物との交流の物語は現代の随筆やテレビで語られる話によくある。自分の身近なこととして受けとめられている。

作文例Gは、前半では長十郎に共感しているが、後半で批評する立場に立っている。共感して読んだが、十七歳という自分とほぼ同じ年齢の長十郎を、考えていく中で、どうだろうという思いになったのか。素直な思いが分かりやすく書いてある。

作文例Eは、小説を理解し、自分の言葉で説明している。「殉死」をその時代特有のものとみながらも「人の命に対する根底の考え方というものは、現在と変わらないものだと思います。」と自分とその時代とをつなげたこととして説明していく。そして、阿部一族を「悲しい一族」と心情でも受け止めている。表現も優れている。

作文例Jは「阿部一族」を「ただならぬ人達」と共感している。「阿部一族」を阿部家の登場人物の立場に立って理解するのは難しい。だから、作文でも阿部家の者をとりあげたのは9人である。その中で「弥一右衛門にはじまり滅亡に終わった阿部一族。彼らはやはりただならぬ人達だ。この物語すべてにそれが感じられる。」と、とらえている。この作文は、読み取った力強さを、力強い調子で表現しようとしている。「阿部一族」の文体を、自分の作文に生かそうとするその心意気がいい。

(4) 教室と個としての学習者

「殉死は」「なんのメリットもないものだ」と批判した作文例Iは「高瀬舟」の作文例Bを書いた生徒で、そこでも批判的な文章を書いていた。作品の内容を自己の論理で解消する、という傾向はあるが、面白いことを書く。彼は、批判するとき思考が活動する。受容の視点から書くか、批判の視点から書くかは、生徒の思考の型による面がある。批判する場合、決まった自分の思考の型を振り回すのではなく、理解の対象をひろげいき、考えを深めて批判するのならばいい。

思考の型は高等学校1年の段階では、明確なものではないが、授業では「〇〇らしい発言」というものがある。実際の授業でのIの発表では、教室の生徒は笑い顔でできているし、指導者の「〇〇君らしい」という言葉で笑い声がひびいた。彼に授業の後で「なぜみんな笑うのかな。」と問い、首をかしげているので「批評だよ。ただし、悪いと言っているのではない。」と言った。

学習者は、それぞれの思考の型を持ち、作文などの一人での学習活動ではそれを深め、発表などの教室全体での学習活動では他の生徒と自分とを比べて考えることになる。ただし、作文を書いているときも指導者や他の生徒を読み手として書いているのであるから、大きな枠としては国語の教室というものがある。学習者はその中で、自己の思考の型を成長させていく。発表で教室に笑いが起きることもあれば、F、H、Jのような作文に対してうなずきながらきき、ため息のようなものももれることもある。指導者は大きな枠としての教室を作っている。

(5) 授業からの発展 — 教室の外へ

作文例Hは、思考力のある生徒の作文である。作品の世界と現代の違いを感覚で受けとめ、そこから考えてまとめている。

結びで「もう少し深く読みたいと思った。」というのは、授業では、細かく部分部分について考えることをしなかったのだから、そういう感想がでてきたのであろう。作文の結びとして、歯切れは悪くなるが、よく考えて、そう思うのは大切だ。文章を読む力のある生徒が、授業で力を発揮し、自分を伸ばしていつている。

よく学んだうえでさらに学びたいというのはすばらしい。学習の意味をよく説明している。

例えば、1冊の本で、ここまでは読んで面白かったが、まだ読んでないところがあり、今の自分には少し難しいが価値があるらしい。そういう本が自分の手元にあるということが文化というもの形であろう。